
暗殺者の子育て

近藤義一

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

暗殺者の子育て

【コード】

N2206C

【作者名】

近藤義一

【あらすじ】

主人公は殺し屋。でありながら、妹から押し付けられた赤ん坊の世話をすることを決意した。殺した相手がどこかの組織の重要人物であったのか、やがて命を狙われ始める主人公。赤ん坊は施設に預け、さらに将来を憂いて反撃開始、組織の機能を潰滅。主人公は赤ん坊を迎えに行く。人生のやり直しを誓って。

十代のころから殺人技術を教え込まれているのだから、二十五歳となつた今では立派な暗殺者になつてしまった。

表の世界で生きていくのに必要なこと、もしかしたら人間として生きていくのに必要なことをまったく教わらずに、ただひたすら、どうやったら気付かれずに背後に立てるか、どうやったらビルの上から交差点に差し掛かりつつある防弾ガラス製のフロントウインドウを撃ち抜けるか、どうやったら迅速にその場から消えることができるか、そればかりを教わりればかりを考えていたのだから、やっぱり、暗殺者になるしかなかった。

だから、なるようになった。

そういう意味では順調な人生だが、「人生」に時々引つかかる。人が生きると書いて人生、俺はそれを無理やりに奪つことで生きながらえ、それでいいのかと考えてしまうのだ。

それこそ、引き金を引く直前、ナイフを引き抜く直前、高いところから突き飛ばす直前、まで考える。

暗殺者なんだから、実のところ考えても仕方がない。嫌ならやめればいいのだ。

だが、俺の場合これをやめてさて何をするかと考えても何も出てこない。

これしか知らないのだから。

わかつているのだが、考えざるを得ない状況である。

ともかく俺はカロリーに人殺しの道具と、ピジョンの哺乳瓶「母乳実感」、明治乳業の粉ミルクと象印の魔法瓶に六十 程度のお湯、手製のスリング、パンパースコットンケアウルトラジャンボSサイズを積み込んで、リアに設えたコージイトト・ベビーシートLR EY000105には、生後四ヶ月の赤ちゃんを載せ、仕事に向かった。

育児本を読んでいると、仕事と育児の両立で悩んでいる人がいるらしいが、俺もその一人ではある。

住んでいたアパートのドアの前に、毛布にくるまれた赤ん坊が置き去りにされていたのは、二ヶ月前のことだった。なんだこれは、とすら思う間もなく赤ちゃんだ、さて、どうしようと考えていたのだから、危機管理能力は優れているといえるだろう。

オレンジ色の表紙の手帳が沿えてあった。隣に置かれていたバツグの中には哺乳瓶と粉ミルク、オムツが少々。爆発物が入っていないことを確認して頭に浮かんだのは、もう十年ほども会っていない妹の顔だった。

手紙があった。妹の名前が薄ぼんやりと記されている。

なんとかして。ごめんなさい。

成長過程がしつちやかめつちやかだから俺同様しつちやかめつちやかな日々を送っているのだろう。赤ん坊を置き去りにするくらいはしかねない。居所を知っているのは意外だが知っている奴は知っているし死にたくない奴は尋ねてこないからまあ構う事ではない。

ないがさて、どうしたものか。

母親が何とかしてくれとほりだしたのだから、俺が放り出したところで誰も文句は言えないはずだ。

が、できなかつた。

人殺しの専門家であつて育児の専門家ではない俺は、とりあえず専門家のところへ行くことにした。産婦人科である。そもそも病院などあまりいかない、いくときはしかるべき筋のところ、腕の骨に弾丸が食い込んでいてもいちいち警察に駆け込まないタイプの医者にしかならないから、どうにも勝手がわからない。でもよく考えてみたら、俺が侵入していくような場所は、どうにも勝手がわからないところばかりなのだ、いまさらおたおたしても始まらない。

「あ、赤ちゃん、見てもらいたいですか」

「母子手帳と、健康保険証はお持ちですか」

「保険証は忘れちゃったんだけど」

職業殺し屋で入れる保険があつたとしても、俺はまず入らない。

ともあれ知らん顔をして添えてあつた手帳を差し出した。受付は無表情にページを繰っているから、ご希望通りのものであつたのだろう。何度かうなづいた後問診表をよこし、

「やまもと、つばさちゃんですね。名前をお呼びしますから、こちらにご記入の上お待ちください」

やまもとか。ともあれ今日一日はやまもとでいなければなるまい。病人にはしんどそうなこしらえの椅子に身を落とし、書き込み始めた。

後で見直したところでは、この手帳は母子手帳というものだそうである。生まれてから今までの情報が記されている。親が覚えているんだからいいじゃないかとも思えるのだが、人間は忘れるものだし、またこれがあるからこそ拾った赤ん坊でも何とかかなるとも言える。

何とかなるかな。そう思えたのも、この母子手帳のおかげである。

暗殺者は要するに的確に確実に殺して誰にも気付かれずに身を消せばいいという、極めてシンプルな存在である。こういう事情があるから殺さなくてはならない、または殺してはいけない、などと考える必要がない。相手がどんな政治的信条を持っていようが家族がいようが愛人がいようが本当は明日交通事故で死ぬ運命だろうが関係ない。

あいつを殺したい、と思う瞬間は、おそらく誰にでもあるだろう。俺は訓練の結果として人を殺す技術は身に着けたが、まともな育てられ方をしていないので、感情が高ぶった結果として人を殺したくなるという状態がわからない。さりとて、殺してはいけないとも思わない。金になるかならないかが判断する基準の第一である。次に、実行可能かどうか。出来る出来ないは常に考える。ま、大体的場合遂行可能だからわりとほいほい引き受けてしまふのだが、負担がか

かる割に実入りが少ないようなのは当然敬遠したい話だ。

赤ちゃんは泣く生き物である。泣くのは元気だからで、健やかに育っている証拠なのだが、周囲は迷惑そうな顔をするばかりである。ことに、仕事の話をする場では。

「なんとかならないんですか」

取引相手。というか、あくまで仲介だが。俺の取引相手はあくまで的、だと思っっている。

あいつを殺してくれたらいくらかやる、くらいの話ならインターネットで十分なようだが、やはり根と葉があつて茎がないという、本気で仕事ができる状況を作るには、誰にも見られないようにするのが望ましい。

それどころではない、赤ん坊が全人類を殺しても足りない、てな勢いで泣いている。が、なにぶんひ弱ではあるから、虐待されたりするかわいそうな存在でもある。これだけ懸命に泣いているのに、殺されるときは比較的あっさりである。大人だってそうだ、一生懸命やっているから評価されるとは限らない。殺されるときは交通事故故であっさり殺されたりする。

すべての殺された赤ちゃんへ。君たちはひ弱だから殺されたのではない。それはそういうものだったのだ、そういう世の中なのだから。大人だって、君たちと同じように、実はひ弱なのだ。

「子供は泣くのが仕事です」言いながらミルクの支度をする。「すいません、お湯もらえますか」

「仕事の話どころじゃないじゃないですか」

「大丈夫ですよ、続けてください」

書類などのやり取りはしない。すべて口頭で済ませる。これもすべて証拠が残らないようにするため。間違いがあつてはたまらないが、書類がありさえすれば間違いが起こらないというものでもない。

「では続けますが、的は身長百六十五センチ、体重が七十五キロ、胸囲が」

「おーよしよし、騒がしいところだから気が散るのかい」

「えー、額が禿げ上がって」

「あらあらあら、そんなにあわてて飲むと、ほらほら」

「それから、駅周辺の」

「あー、びつくりしたか、びつくりしたかい、大丈夫だよだいじよぶ」

「やめましょう、なんか、テンションがあがらない」

「つばさは百五十ミリリットルを、時々辺りをうかがいまた俺の顔を確かめるように見つめながら着実に飲み下していく。」

「哺乳瓶の乳首部分には穴が開いていて、飲んだ分のミルクと空気が入れ替わる。飲むたびにこの部分からじゅー、じゅーと音がして残っているミルクの中に気泡が連なり、おおよく飲んでるなあと安心するのだ。からの茶碗ばかりが食欲旺盛の証ではない。」

「テンションがあがらない、ですか」

「はあ。よく平気ですね、仕事の話聞きながら赤ちゃんの面倒なんか見て」

「平気じゃないですよ。育てる人はいつでも死に物狂いです」

「しかしまあ、カ一杯ミルクを飲んでる赤ちゃんを前にしては、仕事の話どころではない。」

「母親に関しては、何も覚えていない。父親はおぼろげながら覚えている。どうも自分で殺したのではないか、最近そんな気がしている。はつきり覚えていてもよさそうなものだが、袋の中に、はちきれんばかりに無理やり押し込んだぬいぐるみのように、出てきそうに出てこない。」

「妹とともに預けられた施設でテストをさせられた。知能テストとか、発達を調べるものだといわれていたはずだが、何のことはない人殺しに向いているかどうかを調べるためであったのだ。妹には普通に生きる素質があったらしく、他の身寄りのない不幸な子供と同様不幸な子供として育てられていた。」

俺は、不幸な殺人マシーンとして育てられていた。

職業柄時間が不規則なので、夜中不意に起きてぐずりだすつばさをあやすのはさほど苦痛ではなかった。しかし、どうやっても泣き止まない赤ちゃんという存在そのものには、やはり手を焼いた。

が、赤ちゃんはそういうものなのだ。

因果を考える。泣くからには理由があるからに違いない。腹が減ったのではとか、布団が硬いからではとか、暑いからではとか寒いからではとか。

赤ちゃんの因果を読み取るのは大変難しい。なぜなら彼らは理屈で生きているわけではない。手段がほかにないから泣いているだけなのだ。考え付きそうなところ、できそうなことを処置してまだ泣くなら、これはもうあきらめて散歩かドライブに出るのがよろしい泣き止んだからといって、散歩が効果的だとかは思わないほうがいい。いつでも泣き止んでくれるとは限らないからである。

泣き止む止まないはともかく、因果を読むのは難しいばかりではなく、親の苦痛にしなければならない。わからないものは誰にだってわからない、それを、どうしてだろうとどうしてだろうと考えているのは、考えなければいけない状態になっているのは、苦痛を通り越して拷問ではないか。

拷問だ。適当に息を抜かないとやっていられない。逆に言えば、息を抜けばやっていられるのだ。親だから。

狙いを定めて引き金を引く。狙いを定めるにはいくつかのポイントがある。風向き、明るさ、湿度。それ以外は、狙いを定める前に決定しておかなければならない、決定していなければならぬことからだ。

それだけで狙撃ができるのか。できる。狙撃ばかりが人殺しの手段ではないからあまり気にしないが、風向きと明るさと湿度さえわかっただけで、必ず致命傷を負わせることができる。要は対象との

距離であり、この三つの要素は距離を変化させてしまつから抑えておかなければならないのだ。

が、もっと気をつけなければならぬのは、ビルの屋上など、狙撃に適した場所はたいがい、強い風が吹いている。屋外でなくても、銃口を露出させなければならぬから、どうしても隙間風が入る。しかも夜であることが多い。赤ん坊が冷えないように、毛布などを用意したほうがいい。寝返りをするようになると、足場の悪いところでは落下の危険性もあるから、バスケットなりキャリアなり、保定できるものが要だ。おんぶや抱っこひもは、狙撃姿勢をとる都合上具合が悪い。

どうして育てようと思ったのか、育てなければならぬ理由は何もないから、あくまで俺の気持ちしだいではあった。しかしわからない。

今はいい、さてこの先どうする、考えれば考えるほど、育てようと思った俺の気持ちがわからない。はかなげにうごめいている小さな人間を見て、何とかしなくちゃと、できるわけもない決意をした自分がわからない。

犬猫ではないのだ。と、思い至り、ふと自問する。犬猫ならかわないのか。飼いたい、そりゃ結構、財力と時間に余裕があるなら結構結構、面倒見切れなくなった、棄てましょう。

ま、それでかまわないとは言える。犬猫は自力で生きていけると思われているらしいから。いつときであれ傾けた愛情と、それがゆえになついた生き物との関係が、どうでもよいものならば。

お説教ができる立場ではない、他人を殺してようやく生きているのが俺。だから赤ん坊を育てる資格はない、赤ん坊だって迷惑だ、犬猫ですらお断りだろう。

面倒見切れなくなつたら棄てるのか。実際俺だって、そうする他はないのかもしれない。

赤ん坊が泣き止まなくて困った。何が悪いのかさっぱりわからない。ともあれ仕事の時間は近づいている。カローラに、線香花火の玉みたいになつた赤ん坊を投げ込み、アクセルを踏んだ。

しばらく走つたが、泣き止まない。的はもうじきステージにさしかかる。いくら段取りを組んだところで何かしらイレギュラーが出るものだが、いるべき時間、いるべき場所に俺がいないという経験は皆無である。何があるかと現場には一時間前には着いている。このときも時間には余裕はあつた。ただそこに、泣き止まない赤ちゃんがいるというだけだ。ここにいますよ殺気張り銃を構えた人がと世間に広く教えてくれそうに泣き叫ぶ赤ちゃんが。

さて困つた。もっとも必要なのは赤ちゃんを黙らせることである。殺してしまうのが手っ取り早い、それならばはじめから見殺しにすればよかつたのだ。今殺したところで時間差が生じただけであり本質的には何も変わらないが、言い始めれば俺なんか生まれてこなきゃよかつたとかにまで至るから、もう少し穏便な方法をとりたいものだ。

よし。

赤ちゃんにも協力してもらおうではないか。

赤ん坊を抱いている自分というのは、傍目には新米のお父さんとも見えているのだろうか。うわ、人殺しが赤ん坊抱いてるよ、自分の赤ん坊はかわいいのか、とまで見通す人はあまりいないか。

新米の殺人お父さんには、子育ての仕方を教えてくれる人がいなかった。人に教わるよりも、自分で何とかしようとするたちだから不安にはならなかつたが、赤ん坊を前にして、さてどこから手を付けたものか、はじめのうちは見当もつかなかつた。

殺しはできるが、生かしはさっぱり。

病院に行った帰り道、本屋に立ち寄つた。そして安心した。

いや、あるわあるわ育児本。育児関連だけでコーナーができていて、新生児から三歳児、四歳児くらいまでをフォローする、にぎや

かな色使いの表紙が並んでいる。新生児という言葉もこの手の育児本で初めて覚えた。

安心した勢いで十冊くらいまとめて購入、おそらく全く縁のない「母乳育児BOOK」なんていう本まで買い込んでしまったのだから、当時の必死さが偲ばれる。

読み漁って感じたのは、どこの出版社のどの雑誌であれ、お役立ち三割、励まし七割。安心して。あまり気にしないで。無理しないでのんびり。そこらへんの言葉が出てこないページは皆無である。出来ないものは出来ないと思うのだが、やめてほかの人に任せたほうがいいというアドバイスは一行も見かけない。

思い悩む人が多いのだろうとは、励ましが多いことから想像がつく。でもいくら励まされたって駄目なものは駄目だ。動物園では育児を放棄してしまう動物はそれほど珍しくないし、野生にだっているだろう。

あなたには無理です、あきらめなさい。赤ちゃんはここへ届けなさい。そういう紹介欄があってもいいのではないか。

いや、そう言われてほっとする人は、やはりこういう雑誌は読まない。

的は人気の多い時間に人気の多い交差点を通る。時間に几帳面であり決まった時間に決まった場所にいる。他の場所は閉鎖した空間であり侵入の手間などを考えると、人気が多いというリスクを考慮してもここで殺したほうが面倒がなくていい。無茶だが、赤ちゃんを抱えてこじ開けたり叩き割ったり解除したりと、どれだけ冷や汗をかくかといえ、これはもうやってみるとしか言いようがない。

赤ちゃんの面倒を見るようになって、時間のかからない方法を選ぶようになった。殺しも含めて生活全般。食事なんかもう、パン食が当たり前である。サンドイッチとかおにぎりとか、昔から忙しい人間はいたのだ、子育てが発想の原点かどうかはともかくとして。

スリングを引っ掛けて車外に出、泣き喚く赤ん坊をベビーカーに

乗せる。よーしよし、よーしよし、ベビーカーとからのスリングの両方に、父親面をして声をかけ、的が近づいてくるのを待つ。適当な距離まで近づいたら、スリングの中に隠した鉄砲の引き金を引く。精度はさほど高くないが、消音と消煙にだけは気を使っている銃だから、スリングにあいた三つの穴さえ見られなければ、気付かれる心配はない。的が倒れたことを確認したら、やれやれ、ふたりも面倒見るのは大変だよな、と疲れた表情で立ち去ればよろしい。二人の乳飲み子を奥さんに押し付けられ途方にくれている父親がまさか暗殺者であるとは誰も思わないらしい、ときどき、がんばってくださいね風のなんて笑顔を向けられたりもする。

困ったもんだが、さっさと立ち去ることにする。

赤ん坊はすくすく育つ。棄てられたとき二ヶ月、人間というにはあまりにも貧弱で、何かうごめくものであったつばさも、今では銃のメンテナンスをしているときに手を伸ばし、ひっくり返してスプリングやねじを紛失させてしまうほどに育った。

そういう欠陥銃で仕事をしてしまう俺も俺だが。

ともかく、一年前の自分と、二、三ヶ月経過した赤ん坊とを比べると、自分の成長の遅さにあきれられるばかりである。ぼちぼち寝返りもするだろう。何か食っていると、凝視してうらやましそうな顔になる。興味が出てきたのだ。この先はいはいして、歩き、言葉を覚え、走り、しゃべり、聞き、めちゃくちゃな育て方の結果としてめちゃくちゃな人生を送るだろう。

親がそうなのだから。

自分が殺人専門家であるだけに、殺したそうにしている奴はすぐわかる。熟練の修理工が音を聞いただけで故障箇所がわかる、よくなものだろうか。

散々殺したんだからいつ死んでもいいだろというわけにもいかない。が、散々殺したんだから、危ない目にあつたなあ、程度で済ま

せようと今までは思っていた。

しかし今回、狙撃され、弾をよけたら赤ん坊を落とすようになってしまった。何が気に入らないのかぐずりだし、やれやれと抱き上げようとしたところだった。

俺は頭にきた、らしい。感情が動くなんてことは久しぶりだ、そうか、これが怒ることか。俺が狙われるのは日常だからいちいち腹は立たない。赤ん坊が巻き添えになりそうになったからか、それともぐずりだした八つ当たりかは判然としない。

しかし、どうする。赤ちゃんを背負っていつまで逃げおおせるだろうか。

殺されそうになる覚えは、それなりにある。怨恨というのは少ない。恨みたくても誰を恨んでいいかわからないには、証拠を残さない。むしろ、殺されてはかなわないから殺してしまえという場合が多い。こういう依頼者は、武器があるから戦争すると考えるタイプだろう。

同じ国内で活動している殺し屋同士は、なるべく仲良くしておこうという話になっている。殺し屋どうして殺しあってしまったてはお互い飯の食い上げだからだが、従って素直に考えれば誰かに頼まれた外国人である。

いくらインターネットが充実しているからといって、一般人が外国人の殺し屋を雇えるほど便利な世の中にはなっていないようだし、殺し屋にしてみれば何の後ろ盾もない一般人の頼みで、わざわざ外国からやってくるような暇な奴がいるとは考えにくい。

つまり、大きな組織に頼まれた外国人が実行者であると、憶測できる。あくまで憶測。

殺し屋というのは付きまとわれるとしつこく、一人なら何とかしのげるだろうが、さて赤ん坊を背負ってとなるとかなりしんどい。

さすがに、もう無理か。ともかく情報を集めなければ。

子育ての方法は、それこそ育てる人の数だけある。手の大きな人

は沐浴に苦勞はいらないだろうが、そうでない人は工夫をしなければならぬ。

ただ、医学的にこうしたほうが事故がないですよ、という情報は必要だ。予防接種の日取りなどは役所が通知してくれるからいいが、親の代での常識が子の代では間違いでした、というのが結構ある。

今そんなことする人はいないが、大昔、オムツは腹巻のようにくるくる巻いているだけだった。が、これだと強く巻きすぎてしまうと股関節が外れてしまう可能性がある。赤ちゃんはがに股になるのが正常で、現在のように相撲の回しスタイルに落ち着く。

また、抱き癖という言い方も媒体からは消えた。古い人だとまだいう人がいるが、赤ちゃんは基本的に抱っこが好きなのだ、というか、抱っこがなくては生きられない。ために、どこかに寝かせておいたときとずっと抱いていたときとで、目覚めの表情を比べてみるといい。前者の場合、全世界の不快感詰め合わせの箱を開いたような顔で泣き喚く。何も赤ん坊のうちからそんな顔にしなくてもいいだろう。

と、わかつてはいるつもりだが、抱っこばかりしているわけにもいかない。ああごめんごめんといながら座布団の上に置きっぱなしにしてしまう。緊張する仕事の後など、どれだけ泣かれても抱く気が起きず、隣の部屋に逃げ込んでしまうこともある。

それはそれで仕方がない。泣いている赤ちゃんというのは、こちらに余裕がないときにはなかなかのプレッシャーをかけてくる存在である。暗殺者が言うのだから、かなりなかなかである。ちよつとやり過ぎして抱っこするほか打つ手はない。

情報といたって、さてどこのどの組織がわざわざ外国から殺し屋なんぞ雇いやがったか、簡単には出てこない。

赤ん坊を背負っている俺を撃つたのだから、ここ二、三ヶ月の話だ。的が赤ん坊を背負っているかいないかは当たり前だが大きな違いであり、俺ならまず撃たない。外国人だって基本的に同じルール

の中でやっている。赤ん坊がかわいそうだから撃たないのではない。赤ん坊がいるという情報は受け取っていなかったから撃てないのだ。ここ二、三ヶ月でやった仕事は二件。どちらも組織の幹部風ではある。普通の企業だって組織なんだし、少々荒っぽい仕事をする連中を束ねる立場にいればどうしたって風貌がスジ者に似てくる。政治家なんか、テレビで見る限り非民主的暴力的な人々である。人のことは言えない。殺し屋なんか無表情で、気の利いたマネキンよりも非人間的である。

的がどうという人間かについては詳しく聞くが、社会的にどう分類されるのかについては無頓着だから、ここから先を知るの難しい。襲われるたびごとに何とかしのぐか。ひとりなら何とかなる、か。

さし当たって、赤ん坊は施設に預けよう。最初から無理な話だったのだから。

そうだ、ありえない話だったのだから。

「赤ん坊はどうした」

「預けましたよ」

「そうだな、そうだな。それが当然だ。で」

「爆薬五トン」

「ずいぶん大掛かりなようだが、ま、俺の知ったことじゃねえけど」

赤ん坊がいなくなっただけでほっとした。気が抜けた。誰がどうなるうともう知ったことではない。あんなにかわいいもの、面白いものをなくしてあと何を守れというのだ。

誰が俺を狙ったか。冷静に考えてみれば答えはすぐに出た。わざわざ外国から殺し屋を招く余裕があり、赤ん坊を背負った日銭稼ぎの暗殺者をつぶさなければならぬほど神経質で、身内を殺されたらすぐさま報復しなければならぬほど体面が気になり、各方面からの情報をしらみつぶしに調べて俺という的を探し出すことが出来る暇がある組織。

国家機関だ。

答えが唐突に出てきたので驚いたが、思考経過を整理してみる。

やくざ連中はそもそも暗殺者に頼らないし、暗殺者のほうも組織暴力系とは疎遠である。面倒だし、軽蔑しあっているのだ。組織力と個人芸はいつまでたっても相性が悪い。だから企業は集団の力が必要な部署と個人の能力でまかなったほうがいい部署とを明確に分ける。

対して国家機関は目的のためには手段を選ばない。時には手段のためには目的を選ばないことすらある。軍事力はあくまで手段だが、使いたいからさして用のない国の戦争に乗っかってみたりする。恥も外聞も気にしない。規則にのっとって動く、規則にのっとっていけば、何をしてもいいと考えるからである。末端を排除してことが済むならそれでよしと判断する構造だからである。

五トンの爆薬は、関連のありそうな最高裁判所、警察庁のある中央合同庁舎二号館、国会議事堂に適当に分配し、インターネット及び電話回線に介入して、キーワードを入力もしくはキーワードが含まれるファイルを開くと爆発するように仕掛けた。

キーワードは、赤ん坊、乳幼児、二十歳代、暗殺者、殺し屋。

たくさんの人が死ぬだろう。中には当然赤ちゃんのいる父親だっているはずだ。たまたま通りがかった家族連れも巻き添えを食うだろう。しかしこうしなければ俺の赤ん坊は守れない。俺が接触する可能性がある以上赤ん坊を監視するようになるのは目に見えている。そんな状況でまともな育つわけがない。俺の子供を、俺以外の人間がまともでないように扱うのは我慢できない。

そして今日、仕掛けた三つの建物が崩壊した。

その後は狙われなくなった。殺せというデータもろとも崩壊したのか、組織が入れ替わったからどうでもよくなったのか、内部で変化があったのか、それはわからない。

どうでもいいのだ、できることはやったのだから。

誰もいなくなつた部屋で、使いかけの粉ミルクと哺乳瓶、もうそろそろと思つて用意しておいた離乳食の転がった部屋で、ごろりと横になる。

本当に、出来ることはすべてやっただろうか。赤ん坊のためにしてやらなければならないことすべてやっただろうか。

人を殺すしか生きる術を知らない。いや、知らないのではない。仕事をすればいいのだ、世間で認められているような。でも、できるだろうか、人殺ししか知らない俺に。

出来ないことは何もない。俺は親であり、親は子供のためならばなんだつてする。自分を生かすために他の赤ん坊を殺した親を、おそらく許しはしないだろう。血に汚れた手で育児なんてとんでもない。とんでもないことだが、親はやらなければならぬ。子供にとつて迷惑だろうと何だろうと、親はやるしかないのだ。

あの子の父親であるために。

だから今日、迎えに行く。近頃こんなにどきどきしたことはない。

(後書き)

育児でどたばたするさまを書いたほうが面白いんだろっけど同類
たくさんありと思ってごうじました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2206c/>

暗殺者の子育て

2008年8月29日17時39分発行